

最後のフッサー(1) : 超越論的自我は存在するか?

MORIMURA, Osamu / 森村, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要

(巻 / Volume)

107

(開始ページ / Start Page)

19

(終了ページ / End Page)

40

(発行年 / Year)

1998-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005025>

最後のフッサール (1)

——超越論的自我は存在するか?——

I フッサールの最期 ——はじめに代えて

フッサールは、一九三八年四月一三日午後二時三〇分頃、看護尼クララ・イミッシュに、「やはりそうになりました。生と死とが私の哲学の最後の努力 (Streben) となりました。私は哲学者として生きてきましたし、哲学者として死ぬことを試みようと思えます (Ich habe als Philosoph gelebt und will als Philosoph zu sterben versuchen)」と語っている。そして、それ以後極度の衰弱におそわれ、言葉を発することもままならなかったにもかかわらず、ある日、深い眠りから覚めたフッサールは、夫人マルヴィーネに向かって、異常に幸福な面持ちで、「私は全くすばらしいものを見た。いや、おまえにはいえない、いや (Ich habe etwas ganz Wunderbares gesehen. Nein, Ich kann es Dir nicht sagen, Nein!)」と語ったと報告されている。フッサールが深い昏睡の中で、何を見、何を幸福と感じたか、今となってはもはや知る由もない。四月二七日早朝五時四五分頃、現象学の創始者は七〇年と一九日の生涯に幕を閉じることになる。二九日の葬儀には、一九三〇年代をフッサールの傍らで過ごした愛弟子オイゲン・フィンクが告別の辞を述べてはいるが、大学からの参列者はごく少数に限られた寂しい葬列だったという。ひとりのユダヤ人哲学者の葬儀への参列は、当時のドイツ国内の状況を勘案すれば、それ自体、危険な行為であったことは想像

森村 修

に難くない。

しかし、ここでフッサールの最期の場面を取り上げた理由は、当時の過酷な時代状況の中で悲劇的ともいえる死を、フッサールが迎えたことを確認するためではない。また、彼の葬儀に際して、何人の人たちが参列したかという問題をしているのではない。私がフッサールの臨終にまつわるエピソードを長々と語った意図とは、第一に、彼の最後の言葉の中に、フッサールの全哲学的當為ばかりでなく、彼自身の生の在り方と哲学する態度との結びつきが象徴的に表現されているということ、そして第二に、葬儀に参列し告別の辞を述べたフィンの存在を強調したかったということにある。

私は、本稿において「最後のフッサール」という包括的な主題のもとで、一九三〇年代のフッサールの「超越論的現象学」が、彼の「生・人生 (Leben)」とどのような関係をとりながら成立したのかという問題を検討する。ただし、「最後のフッサール」という主題は、それ自体でさまざまな問題をはらんでおり、それらを逐一剔抉し、検討することは相当困難な作業を必要とする。したがって、われわれは本稿を、この主題における一連の論考全体の「序説」として位置づけ、さらに、特定の問題に限定して検討することにした。

したがって、ここではまず第一に、フッサールの「生・人生」における「超越論的現象学」の意味とフィンクとの関係を時系列的に確認した後、「デカルト的省察」の出版をめぐる生じた紆余曲折をロマン・インゲルデンなどの証言をもとに再構成する。第二に、「デカルト的省察」成立をめぐる諸々の問題が、陰に陽にハイデガーの存在に起因するものであることを確認する。その際、フッサールがハイデガーとの共同執筆する予定であった「ブリタニカ百科事典」の「現象学」という新しい項目の草稿について、ハイデガーが突きつけた問題——「超越論的自我の存在」の問題——が、いかに一九三〇年代のフッサール超越論的現象学に対して決定的な影響をもたらしたかという点について検討しよう。第三に、ハイデガーの提起した問いは、フッサールの全幅の信頼のもとにあったフィンクにおいても取り上げられ、「超越論的自我と人間の自我の同一性・差異性の問題」として変奏され、結果的にフッサールとフィンクとの共同作業としての「第六デカルト的省察——超越論的方法論の理念」〔以下「第六省察」と略

記」の動機を形成したことを指摘する。

II フッサールの哲学的態度

先に触れたように、フッサールはあくまで「哲学者 (Philosoph)」として生涯を終えたのであって、その意味で「哲学者」という在り方は、単なる職業としての「(元) 哲学教授」を意味しているのではなく、フッサールにとって自らの実存・生存 (Existenz) の可能性の条件であった。イミツシュに向けてられた言葉からも推察されるように、フッサールが臨終の場面においてすら、哲学を営む態度において「実践的」であったことを軽視すべきではない。フッサールが「哲学者」という「使命 (Mission)」を自覚していたことを、われわれは忘れてはならない。ロマン・インガルデンは、フッサールが自らの哲学的使命を自覚していたことを報告している。彼の報告によれば、一九二九年四月八日にフッサールは自分の七〇歳の誕生日の祝賀祭で次のように語っている。

「私は一つのことを拒絶しなければなりません。それは、功績についてのお話です。私には功績など何もありません。哲学は私の人生の使命 (Mission) であつたのです。私は哲学しなければならなかつたのです。

そうしなければ私はこの世界で生きることができなかつたのです (Ich mußte philosophieren, sonst konnte ich in dieser Welt nicht leben.)」¹⁾

フッサールの後を襲つてフライブルク大学の正教授の地位についたハイデガーの祝辞をうけて、退職した教授フッサールの「哲学をしなければ生きられなかつた」という言葉が、彼の「哲学を営む (Philosophieren) 態度」のすべてを物語っている。しかも、「哲学しなければ生きられない」という状況は、それ以後数年足らずの年月の中で、フッサールにとつてますます切実なものとなつていったであらうことも想像がつく。フッサールにしてみれば、困

難な時代を生き抜くためには「哲学」が必要であったのであり、必然的に選ばざるを得なかった「召命としての職業(Beruf)」であったといふべきである。「哲学者として生き、かつ死ぬ」ということは、フッサールにとって一つの「使命」であった。「哲学という使命」とは、哲学することが生きることであり、さらに、生きることはずなわち哲学的に生きること、哲学すること(Philosophieren)そのものを意味している。しかも「哲学的に生きること」は「努力(Streben)」によってのみ為しうることであって、それこそがフッサールに課せられた「使命」であり、フッサールの「宿命(Schicksal)」と言い換えてもよい。

したがって、「哲学を営む」という使命を課せられたフッサールにとって、哲学的著作とは自らが生きた証であり、それ自体、ひとつの〈告白〉もしくは〈独白〉でもある。最晩年において、フッサールは、「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学」(一九三六年)「以下『危機』書と略記」のある箇所であのように告白している。

「私はただ、私の見るところを述べ、示し記述するだけで、教えようとは思わない。私は哲学的な現存在という宿命(das Schicksal eines philosophischen Dasein)を全面的な誠実さにおいて生き抜いてきたものとして、まず何よりも私自身に向かって、ひいては他者(Anderer)に対しても、私の知る限りのことを良心的に語ろうという以外の、いかなる要求ももたない」(VI/17)。

フッサールの言葉から理解されるべきことは、たとえ他者に向けられたものであったとしても、「危機」書とは、そしてより広くいえば、フッサールの超越論的現象学とは、何よりもまず、自分自身に向けられた〈告白〉であるということだ。そして、彼は自分が見たものを「良心的に語る」ことで、彼自身が自らの思考の過程を自らの内で熟慮すること(Selbstbesinnung || 自己省察)を哲学の目的にする。フッサールにとって、超越論的現象学とは、まさに「普遍的な自己省察と自己責任(universale Selbstbesinnung und Selbstantwortung)」の哲学(VI/272)であり、「おのれ自身に到来する絶対的理性の担い手としての哲学するエゴ(das philosophierenden ego)——その

サールの三〇年代を語る上で、フィンク存在を忘れるわけにはいかないばかりか、当時のフッサールの超越論的現象学はフィンクとの対話に基づいてしか成り立ち得ないといっても過言ではない。フッサールの「超越論的現象学」の最終的展開はフィンクとの対話に基づいており、それは単なる対話ではなく、ある種の緊張をはらんだ一触即発的な「対決」を内に含んだ対話であったことは注意されるべきである。

フィンクは、彼の三〇年代の論考において、ハイデガーの薫陶を受けつつ、フッサール現象学の枠内にとどまろうとする。しかしその結果、彼はフッサールが意図しなかったであろう方向へと現象学を屈曲させていく。言うなれば、フッサールとの対話・対決を通じて、ハイデガー的存在論を超越論的現象学の中へと注入し、それを「存在論化」しようとする。当然、そのような超越論的現象学の「変質」は、フッサールの側から見たとき、「ハイデガー＝フィンク存在論」対「フッサール超越論的現象学」という図式として把握される。しかも、存在論によって引き起こされた「超越論的現象学」批判が、結果的に、フッサール自身による超越論的現象学の「自己批判」を必然的にもたらすことになったことは、ひとつの歴史の皮肉だといえるかもしれない。

III 「デカルト的省察」という「問題」

ここでは、多少迂遠かと思われるが、フッサールが晩年を過ごした一九二〇年代末から三〇年代の状況を様々な証言をもとに再構成してみよう。そうすることで、彼がどのような経緯で、超越論的現象学の新しい展開を企図したかを確認しよう。

フッサールは、一九二八年五月のオランダ訪問の際に、異端の哲学者シェストフの誘いによってパリ講演を内諾する。そして、翌二九年二月にパリで講演を行い、フランスの聴衆に好評をもって迎えられた。帰国後フッサールは、パリ講演を「デカルト的省察」のフランス語版として公表しようとして鋭意努力し、講演では「概要」にとどまっていた「相互主観性の理論（ないしは現象学のモナド論および超越論的観念論 (die Theorie der Intersubjektivität

(bzw. Monadologie u. tr [anszendentalen] Idealism der Phänom [enologie])」を組立て直し、「新しい『デカルト的省察』が完全に形成された」のである。二九年五月二六日付けのインガルデン宛の書簡で、フッサールは、こうして成立した『デカルト的省察』を自分の主著とみなしていると告白している。⁽⁹⁾ところが、『デカルト的省察』のフランス語版が出版されたのは、ようやく一九三一年になってからだった。インガルデンは、同日の書簡に後日注釈を施し、次のように推測している。

「この「五月二六日付——引用者注」書簡から知られることだが、フッサールはいわゆる「バリ講演」を『デカルト的省察』として仕上げた後、一九二九年五月末にドイツ語版をフランス語訳と同時に（しかも年報「現象学年報」で）公表する決心をしていた。しかし早くも次の書簡——もちろん約六ヶ月後にかかれただけだが——から、この意図が実現されなかったことがわかる。その理由が何であったのか？ 年報に予定されていた「ドイツ語」編は完成していたのだし、それは翻訳のために送られたものと同一であるとされていたというのに。だから疲労とかその他の障害がこの編の完了を遅らせ、ついであることが計画の変更を引き起こしたというわけではない。何らかの外的要因 (Ger äußere Faktor) がそうさせたに違いないと思われる。しかし何であったか？」。⁽¹⁰⁾（強調インガルデン）

確かにフランス語版『デカルト的省察』の出版が遅れた背景としては、バリ講演を元にしたフランス語版では、講演という制約や、現象学についてあまり正確な知識を持たないフランス人に向けて書かれたために、フッサールにとって満足のいくものではなかったということがある。したがって、現象学に通曉したドイツ語圏の読者に向かって『デカルト的省察』を公表するためには、フランス語版の不備を取り除き、新たな形で『デカルト的省察』を完成させる必要があったのであり、そのことによって、フッサールは自ら主著と名乗ることのできる著作に仕上げる必要があった。しかし、インガルデンもいうように、フッサールの意図した形でのドイツ語版『デカルト的省察』

は実際には公表されず、結果的に、バリ講演を編集し直したドイツ語版が、ステファン・ストラッサーによって『フッサール著作集 (Husserliana)』第一巻として公刊されたのは、彼の死後一九五〇年になってからだった。

ドイツ語版『デカルト的省察』がフッサールの生前に出版されなかった問題について、インガルデンは何らかの「外的要因」が存在していたと判断した。ちなみに、インガルデンはまた、フッサールの書簡について、「フッサールのこの書簡ではじめて、『デカルト的省察』を「体系的著」とするという考えが現れている。しかもこのことはハイデガーの著作、それも——こう推測することができるが——ドイツの哲学者に受け入れられたものとしてのハイデガーの著作と明らかに関連している。フッサールは、『省察』を「存在と時間」に対する対抗力として対置するつもりだったのだ。それがおそらく、『省察』の出来上がっているドイツ語テキストを公表しないことを決定させた、また『省察』の新編を作成しようとする意図を固めさせたあの「外的要因」なのであろう。この要因はそのことによつて、続く三年ないし四年間にわたる、フッサールの哲学的活動における一つの新しい時期を開くのである」という注記を添えている。おそらく、インガルデンの推測は正しい。ハイデガーとの対決という新たな目標をえた老哲学者フッサールは、主著として準備していた『デカルト的省察』をさらに拡大し、補完し、完備しようとする。というのも、『デカルト的省察』のフランス語版と同様の内容をもつドイツ語版では、ドイツ語圏の読者を納得させられないばかりか、ハイデガーとの対決という観点から見ても十分ではないからだ。

インガルデンが言及している一九二九年二月二日付書簡で、フッサールは次のように語っている。

「目下私はひどく疲れていて、近いうちに休養をとるのを楽しみにしています。私にはぜひとも休養が必要なのです。綿密な「ハイデガーの研究 (Studium von Heidegger)」ですか？ 私は、彼の著作「『存在と時間』」を私の現象学の枠内に組み入れることはできない。しかも遺憾なことに、彼の著作を方法上完全に、そして本質的な点で事象的にも、拒絶しなければならぬ、という帰結に達しました。それだけにいつそう私は『デカルト的省察』のドイツ語版を私の体系的「主著 (Hauptwerk)」として完璧に仕上げることに

を重要視しているのです」(強調フッサール)。

二九年五月から一二月までの間に、ドイツ語版『デカルト的省察』の執筆・出版をめぐって、フッサールに何が生じたのか。どうして、『デカルト的省察』を完璧に仕上げることが、ハイデガーの著作と対決することを意味するのか。そもそも、ハイデガーに対する明確な対決の姿勢は何によってもたらされたのか。われわれは、これらの問いが生ずるのを禁じえない。

それでも、なぜフッサールはかくもハイデガーの『存在と時間』に対して敵対的な態度をとるのか。そのひとつの傍証として、ここで忘れてならないことは、フッサールにハイデガーとの対決をある意味で唆したのが、ドイツの娘婿のゲオルク・ミツシュであるということだ。彼は、自らの『生の哲学と現象学——ティルタイの方向に基づくハイデガーおよびフッサールとの対決(Lebensphilosophie und Phänomenologie. Eine Auseinandersetzung der Diltheyschen Richtung mit Heidegger und Husserl)』を二九年四月八日のフッサールの七〇歳記念祭に献呈している。そして、フッサールは、同年六月二七日のミツシュ宛の書簡で、その著作を興味を持って読んだと語っている。¹⁴⁾

ロナルド・ブルジナによれば、フッサールはミツシュの論述の中に、「ヴィルヘルム・ティルタイの思考と最も矛盾なく両立しうる現象学の代表者としてのハイデガー」¹⁵⁾が公的に扱われていること、端的にいえば、ハイデガーが「現象学者」としてフッサールと同列に扱われていることが、フッサールをして、これまで以上に真剣な態度でハイデガー研究に向かわせたと診断している。一九二九年六月一日に『形式論理学と超越論的論理学』の校正を終えたフッサールは、ハイデガーの名著『存在と時間』と『カントと形而上学の問題』を注意深く読み始めている。ブルジナによれば、六月二四日に行われたハイデガーのフライブルク大学就任講演『形而上学とは何か』によって、自分の哲学に対する態度とハイデガーとのそれとの決定的な差異を自覚したことも背景にあって、「ハイデガーの研究」の必要性を実感した。ミツシュという「触媒」をえたフッサールは、超越論的現象学の真正性をめぐって、『デ

カルト的省察」という舞台において、ハイデガーとの対決を試みようとしたのだ。

ただ、一般的に、ハイデガーを現象学の代表者として認知するだけでなく、現象学そのものの乗り越えをハイデガーの中に見いだすような状況がフッサールを取り巻いていても、彼自身は孤独な戦いを強いられていたということでもなかった。というのも、強力な援軍として若く優秀なフィンクが師の傍らに文字どおり寄り添っていたからだ。「私はE・フィンク博士を理想的な助手に仕立て上げました。毎日の散歩の間に彼とすべての仕事、すべての試み、計画を念入りに討議しています」(一九三〇年三月一九日付インガルテン宛書簡)¹⁵。しかも、一九三三年六月には、フィンクの論文「エトムント・フッサールの現象学的哲学と現在の批判」に対する「まえがき」の中で、フッサールは「私は、私が完全に自分のものではなく、私が明らかに私自身の確信としては承認できないようないかなる文章も、この論文の中にはないと喜んで言うことができます」とすら語っているほどであった。

しかし、事態はフッサールが望んでいたようには進まなかった。なぜなら、フィンクは、フッサールが考えていた以上に強力な〈援軍〉であったが、それと同時に、ハイデガーの圧倒的な影響下にあった〈強敵〉でもあったからだ。フッサールにとってみれば、フィンクが援軍であると同時に強敵でもあったことは、ある意味で皮肉なことだった。なぜなら、最大の賛辞をフッサールから贈られたフィンクの論文は、その末尾において、「ブリタニカ」草稿においてハイデガーがかつて突きつけた決定的な問題と同種の問題——「超越論的自我と人間的自我の同一性はいかにして規定されうるか」という問題——を提出しているのだから。

しかし、フッサールがフィンクの論文の中にハイデガーの問いを見いだしたとき、彼が疑問をもたなかったということは考えにくい。それでは、なぜフッサールは、フィンクの論文に対して、「私自身の確信としては承認できないようないかなる文章もない」と断言できたのか。フッサールは、自分とフィンクの根本的な差異を初めから見抜いていたのだろうか。フッサールは、その差異を最初から認識していたからこそ、フィンクを自分のもとに置いておいたというのは、言い過ぎだろうか。ハイデガーとの対決のための〈仮想敵〉としてフィンクを考えていたというのは。いずれにせよ、〈超越論的自我と人間的自我との同一性の問題〉こそ、ドイツ語版『デカルト的省察』の出

版を遅らせ、さらにその改訂増補版が書かれなければならなくなる本当の理由だったのかもしれない。

以上が、一九二九年二月のインガルデン宛の書簡の中で、フッサールが自分とハイデガーの立場を峻別し、「私は、彼の著作を私の現象学の枠内に組み入れることはできない」とまで書かなければならなかった背景であるといつてよい。そして、フッサールとフィンクの関係は、「デカルト的省察」の増補・改訂ばかりでなく、三〇年代半ばからフッサールが死ぬまでの間、特に「危機」書の完成に際しても全面的にフィンクの援助を受けるほどまで密接になっていく。この時期にはもはや、フッサールはフィンクとの二人三脚なしには自らの哲学的思索もありえなかったのではないかと思われるほどである。また、フィンクの『第六省察』の編集者サムエル・イースリンクは、一九二九年から一九三二年の間、フッサールが『デカルト的省察』の改訂・完成と「現象学的哲学の体系 (System der phänomenologischen Philosophie)」構想において自らの哲学を包括的に叙述することとの間で動揺していたと見ている。⁽¹⁸⁾

ただ両構想の間には密接な関係があり、どちらもフッサールにとってみれば、当時の哲学界を席卷していた「存在論主義 (Ontologismus)」や「実存」の哲学なるものへの流行的な方向転換、「厳密な学としての哲学」の放棄⁽²⁰⁾という哲学的状況の危機を乗り越えようとする意志に基づいて構想されている。両構想の関係を概略的に説明するならば、一方の「デカルト的省察」増補改訂は、直接的にはハイデガーの「存在と時間」との対決において構想され、フッサールの超越論的現象学の主著となるべき著作構想であり、他方の「現象学的哲学体系」構想は、これまでのフッサールの現象学の総決算であり、後の「危機」書をも包括する体系的構想であると、とりあえずいうことができる。

このように三〇年代の時代状況を再構成してみるならば、当時のフッサールは、あたかもハイデガーにせき立てられるかのように、「超越論的現象学」の深化と新たな可能性を模索していく。その際に、フッサールがどうしても避けては通れなかった問題、つまり「超越論的自我と人間的自我との同一性の問題」は、彼の哲学的営為・現象学的営為に決定的に作用しているといっても過言ではない。このことを確認するために、次にわれわれは、フッサール

ルが、ハイデガー哲学のどこに自分の現象学と全く異質な思考を見いだしたのかということの問題にしなければならない。

IV 超越論的自我の「存在」という問題

一九三〇年代にフィンクによって提出された〈超越論的自我と人間的自我の同一性の問題〉は、そもそもハイデガーがフッサールに対して根本的な疑問として突きつけた〈超越論的自我の存在〉の問題に起因している。まず最初に、ハイデガーが一九二七年一〇月二二日にフッサールに宛てて書いた書簡から、彼自身の証言を聞いてみよう。当時、フッサールは、ハイデガーとの共同執筆というかたちで「ブリタニカ」論文に取り組んでいた。問題の書簡は、当時、両者の間で為された様々な討議の一つの証言である。しかも、「ブリタニカ」草稿の共同執筆が、フッサールとハイデガーとの仲違いの直接的な原因となり、以後決定的な絶交状態をもたらした事件であったことは周知の事実に属する。ここでは、ハイデガーの書簡を取り上げることで、ハイデガーが直接的にフッサールに向かって疑義を呈した問題について検討する。また、ハイデガーの書簡を重視するのは、フッサールが「デカルト的省察」を含む三〇年代にハイデガーとの対決を決意した問題を含んでいると考えられるからであり、さらに、ある意味で、三〇年代のフッサールの超越論的現象学の構築に向かって進んでいく方向性を暗に示唆していると考えられるからである。

メスキルヒに在住しているハイデガーは、書簡の中でフライブルクの日々をフッサールに感謝し、「息子のような気持ち」で欲待されたことを述べた後、同封された紙片で、フッサールに対して根本的な問題を提起する。そこでは、ハイデガーが自らの「存在と時間」で試みようとした基礎存在論とフッサールの超越論的現象学の構想との間に、どのような齟齬があるのかという点を指摘していて興味深い。ハイデガーは紙片の最初から核心的なことを言っている。

「次の点に關しては、一致が成立しています。つまり、あなたが「世界」と名づけているものの意味での存在者はその超越論的構成において、まさに「それと」同じ存在様式 (Seinsart) の存在者へと遡行することによっては解明されえないということです。しかし、それでもって、超越論的なものの場所 (Ort des Transzendentalen) を形成しているものが、そもそも存在者ではないということが言われているではありません。——かえってここに問題が生じているのです。つまり、そこにおいて「世界」が構成されるような、存在者の存在様式とはどのようなものなのか、という問題です。それが、「存在と時間」の中心の問題——すなわち現存在の基礎存在論なのです」(強調ハイデガー、IX/601)。

ハイデガーによれば、根本的な問題は、フッサールが「世界」と名づけるものを構成している「超越論的なもの」が存在するとすれば、「超越論的なもの」という「存在者」の「存在様式はどのようなものなのか」ということにある。このような問いをハイデガーが突きつけたからといって、ハイデガー自身が「超越論的なもの」の「存在」を積極的に問題にしようと考えているわけではない。つまり、ここで注意しなければならないのは、第一に、ハイデガーは、フッサールのように「超越論的構成」そのものを重視しているわけではなく、フッサールがあくまで「超越論的現象学」という枠組みに固執する限りでのみ、ハイデガーもまた「存在と時間」の問題意識を超越論的現象学の枠組みに投影しているにすぎないということ、第二に、ハイデガーは、超越論的構成によって「世界」が構成されるといふフッサールにおける「世界」概念そのものも問題にしているということだ。しかも、ハイデガーの問いを別なかたちで引き受けたフィンクは、「世界」概念の問題と超越論的自我の「世界化 (Verweltlichung)」という問題を『第六省察』で取り上げることになる。

ここでいい過ぎを恐れずにいえば、ハイデガーにとって、超越論的現象学における「超越論的構成」という問題は、彼の『存在と時間』の中では最重要の問題にはならないし、超越論的構成を遂行する「超越論的なもの」にあらゆる起源を見出す必要はない。その結果、ハイデガーにとって、所詮「超越論的構成とは、事実的自己の実存

(Existenz des faktischen Selbst) の中心的可能性の「 Γ 」(IX/601-602) でしかない。彼にとって重要なのは、現象学的還元を遂行した結果に見いだされる「超越論的なもの(=超越論的自我)」の隠れた機能としての「超越論的構成」ではなく、実存する事実に具体的な人間の存在様式にある。

「人間の現存在の存在様式とは、他のあらゆる存在者のそれとは全面的 (total) に異なるということを示すことが重要ですし、その存在様式は、それがあるがままのものとして、まさに、超越論的構成の可能性を内に含んでいるということを示すことが重要なのです」(IX/601)。

ハイデガーにとって、フッサールが提起した「超越論的なもの」による「世界」の「超越論的構成」という問題は、自らの人間の事実的自己の実存に根拠をおく限りにおいてしか意味を持たない。もしも超越論的自我がいわゆる人間の自我と異なる存在者であるならば、それは現存在という存在様式とは全く別の存在様式をとらなければならぬ。しかし、たとえ異なる存在様式をとったとしても、それがあくまで存在者であるならば、「存在への問い」という「存在と時間」の根本的な問題から逃れられるわけではない。また、もしも超越論的自我が人間の自我とは別の存在様式をとらないのであれば、フッサールのいう超越論的自我は現存在という存在様式にその根拠をもたずには「存在」しえない。したがって、この場合においても、あらためて「存在への問い」が問われなければならぬ。ハイデガーは、フッサールの「ブリタニカ」草稿における、超越論的自我と人間の自我との関係について次のような問いを提出している。

「純粹に心的なものと区別される絶対的なエゴ (absolutes ego) とは何を意味するのでしょうか? このような絶対的なエゴの存在様式はいかなるものなのでしょうか? ——どのような意味で、それはそのつどの事実的な自我 (das je faktische Ich) と同一なのでしょうか? どのような意味で、同一ではないの

でしょうか？ 絶対的なエゴが定立されているもの(Gesetzes)である場合の、その定立の性格はどのようなものでしょうか？」(強調ハイデガー、IX/602)。

ハイデガーにとって、事実に自我と超越論的な自我は異なるものではない。そうであるならば、事実に・人間的な自我に対する超越論的の自我の特権性は認められない。したがって、そもそも超越論的の自我を「超越論的の構成」の隠れた主体として措定する意味はない。このように、超越論的の自我と事実に・人間的な自我との同一性・差異性を問うハイデガーの根本的な問いに対して、フッサールは、ハイデガーと決別した後に「ブリタニカ」草稿の最終稿を執筆し、そこで次のように言及している。

「それゆえ、私の超越論的の自我は自然的自我と明証的に「異なつて」はいるが、しかし第二の自我でもなければ、自然的自我から言葉の普通の意味で切り離された自我でもなく、と言つて逆にまた、自然的自我と普通の意味で結びついたりそれと組み合わされている自我でもない。まさしくこの超越論的の自己経験の(十全な具体化においてとらえられた)領野が、単なる態度変更によつてつねに心理学的の自己経験に変えられうるのである。この移行に際して、自我の同一性が必然的に確立される。つまり、この移行を超越論的に反省すれば、心理学的の客観化が超越論的の自我の自己客観化であることが見てとられ、こうして超越論的の自我こそ、自然的態度の各瞬間におのれにある統覚作用を課したものであることが見とどけられる」(IX/294)。

フッサールにとつて、超越論的の自我は自然的自我(「人間の自我」とは全く異なるものではないが、だからといって同一の自我でもない。フッサールにとつて、自我とは、「単なる態度変更によつて」超越論的の自己経験が心理学的の自己経験へと変えられても同一性を保持したままでありうる自我である。また、ここでは明示的に語られていない

けれども、その逆の態度変更によって、心理学的自己経験が超越論的自己経験へと変えられる場合においても、自我の同一性は保持されている。このとき、心理学的自己経験を超越論的自己経験へと変換する態度変更のための方法こそ「超越論的現象学的還元 (die transzendental-phenomenologische Reduktion)」(IX/292) に他ならない。しかも、フッサールによれば、心理学的客観化とは超越論的自我的自己客観化なのである。

フッサールの議論を敷衍していえば、われわれは、自ら現象学的エポケーを行い、「現象学的還元」によって根本的に態度変更しない限り、「自然的態度」のままであり、日常的に存在している自我(＝人間の自我・心理学的自我)の背後に遡るようなことはしない。せいぜい心理学的な意味での自己反省を行い、心理学的自我の体験を対象化して把握するに過ぎない(現象学的心理学的還元 [phänomenologisch-psychologische Reduktion])。ただしこの場合、心理学的還元としての現象学的還元は、「心的なものが純粹な固有本質性と純粹に固有本質的な連関において獲得するのに役立つに過ぎない」(IX/290)。したがって、「心的なもの」とはいまだ世界内部的に現前しているものという存在意味 (Seinssinn von weltlich Vorhandenem) を保持しており、「超越論的には素朴 (transzendental nativ)」(IX/290) のままである。当然、その意味では、超越論的自我的「存在」を問題にすることはあり得ない。

しかし、「理論的関心がこの自然的態度を放棄し、普遍的な視線を向け変えることによって意識生活に立ち向かうやいなや——この意識生活においてはわれわれにとっての世界こそがまさしく「世界そのもの」、われわれにとって現前する世界なのである——、われわれはある新たな認識状況に置かれることになる」(IX/288)。現象学的エポケーを試み、超越論的・現象学的還元を遂行し、超越論的自我に遡って初めて、「心的なもの」としての心理学的な人間の自我が、より広範にいえば、われわれの自然的態度それ自体が、超越論的的自我によって「構成されたもの」であることが理解される。つまり、潜在的に機能している超越論的自我が自らを客観化することによって、心理学的客観化としての心理学的自我を構成するわけだが、このことを解明するためには、「超越論的—現象学的還元」という方法を採用しなければならないとフッサールは考えたのだ。

したがって、フッサールにとっては、超越論的自我と人間的自我(心理学的自我)の同一性・差異性という問題

は、「超越論的—現象学的還元」という方法を理解するか否かという根本に関わっている。この意味で、ハイテガーの提起した問いは、心理学的還元の次元にとどまっているといわねばならない。しかも、フッサールから見たとき、「現象学的—心理学的還元」を「超越論的—現象学的還元」と誤解し、両者を混同するとき、超越論的現象学を「現象学的心理学」の枠内で捉えてしまい、それを「超越論哲学」としては理解しないという錯誤を犯すことになる。「超越論的—現象学的還元」という方法の理解は、とりもなおさず、超越論的現象学そのものの理解を意味する。「ブリタニカ」草稿執筆当時の一九二七年二月二六日付けの書簡で、フッサールはインガルテンに「新しいブリタニカ百科事典論文にもたいへん苦勞しました。それは主に、私の原理的な歩みをもう一度根本的に考え抜き、そしてハイテガーは——今や私はこう信じざるをえないのですが——この歩みを、したがって現象学的還元の方法の意味全体を把握していないという事情を考慮したからなのです」と書いてある。²²

したがって、超越論的—現象学的還元という方法をもたない、あらゆる心理学は、たとえそれが「現象学的心理学」であったとしても「超越論的には素朴」というほかない。それゆえ、超越論的自我の存在の問題であれ、それに基づく世界の超越論的構成の問題であれ、「超越論的問題」を検討する場合、「自然的態度における学」としての心理学はそれらの問題を説明することはできない。

「超越論的問いへの回答の拠りどころを、経験的心理学であれ形相的—現象学的心理学であれとにかく心理学にもとめるのは、超越論的な循環 (transzendentaler Zirkel) に陥ることになる。それゆえ、超越論的問いかけが拠りどころにする主観性や意識は——ここでわれわれは逆説的な二義性に直面することになるのだが——けっして心理学によって扱われる主観性や意識と同じものではない」(X/292)。

フッサールの意図にしたがうならば、ハイテガーの「超越論的自我と心理学的自我 (人間的自我) の同一性・差異性の問い」は、それが超越論的自我にかかわる限り、超越論的な問題設定の地盤で検討されなければならない。

しかし、あくまで現存在という存在様式に定位した事実的な人間的自我に根拠をおこうとするハイデガーは、フッサールから見たとき、いまだ超越論的—現象学的還元を通過していないばかりか、根本的に錯誤しているようにしか見えない。「超越論的—現象学的還元の意味と能作を誤解している人は、依然として超越論的心理学主義の中に見立っているのである。彼は態度変更の本質可能性から生ずる、志向的心理学と超越論的現象学という平行関係にあるものを混同し、自然的地盤に立ち止まったままの超越論哲学という不条理に陥っているのである」(I/119)。ハイデガーの問いに対する解答を、フッサールにかわって用意するならば、ハイデガーは「超越論的現象学」そのものを理解していないが故に、超越論的心理学主義の立場にたつことで、疑似問題を提出するという不条理に陥っている。それでは、ハイデガーが落ち込んでしまった「超越論的心理学主義」に陥らずに超越論的現象学の枠内で、〈超越論的自我と人間的自我の同一性・差異性の問い〉に対して、どのような解答が得られるのだろうか。フッサールは「デカルト的省察」において次のようにいっている。

「私(デカルト的省察を行う者)は、超越論的エゴをもって、哲学的に何を始めることができるのか? 確かに、超越論的エゴの存在は、私にとって認識的にあらゆる客観的存在に先行している(vorhergehen)。ある意味で、それはあらゆる客観的認識が行われる根拠であり基盤である。しかし、この先行しているということ(Vorhergehen)が意味しているのは、超越論的エゴが通常の意味であらゆる客観的認識にとつての認識根拠であるということを意味しているといつてよいのだろうか? われわれはあらゆる学問を、そして客観的な世界の存在ですら、超越論的主観性の中に最も深く基礎づけようと試みる偉大なデカルト的思想を、あたかも放棄するようなことをしてはならない」(I/66)。

「デカルト的省察」のフッサールは、超越論的エゴ(超越論的自我)の存在を語っており、それはあらゆる存在に先行している。この意味で、フッサールは、〈超越論的自我の存在〉を問題にしているといつてよい。しかし、超越

論的自我と人間的自我との同一性と差異性について、ハイデガーが期待しているような解答をフッサールは「デカルト的省察」では与えていない。彼は次のようにいっている。

「明らかに次のようにいうことができる。すなわち、自然的態度をとる自我としての私はまた、常に超越論的自我でもあるが、私は現象学的還元の遂行を通じてはじめてそのことを知るのである。このような新しい態度を通じて私が最初に理解するのは、世界全体、したがって一般的にすべての自然的な存在者は、そのつどの意味を持って私に妥当するものとして、つまり変化し、その変化の中でも互いに結びつけられている私のコギタチオ「意識作用」のコギタートゥム「意識されたもの」対象」として、私に対してただ存在しているに過ぎない。そして、ただこのようなものとしてのみ、私は存在者の妥当性を認めるに過ぎない」(I/75)。

先に確認したように、フッサールにとって、自然的態度をとる人間的自我と超越論的自我は同一であり、それは現象学的還元を遂行する主体としての「私」フッサール」もまた意味している。こうした事態を、ジャック・デリダは「私の超越論的私」「自我」(e)は、フッサールの明言によれば、私の自然的・人間的私「自我」(e)とは根本的に異なるものである。にもかかわらず、前者は後者からいかなる点においても区別されない。つまり、区別という言葉の自然な意味において規定され得るような、いかなる点においても(超越論的)私「自我」(e)は何か別の私であるわけではないのである」といっている。しかし、世界を構成する自我と世界の中に内属する、いわば「構成される」人間的自我が共に「私」という同一の主体に帰属するならば、両者の間の差異はどこに存することになるのか。ハイデガーの提起した問い、「どのような意味で、絶対的エゴはそのつどの事実的な自我と同一なのでしょか?」どのような意味で、同一ではないのでしょうか?」という問いに対して、フッサールはある意味で全く答えていないように見える。しかし、フッサールは両者を全く完全に分離することも考えていなかったし、ハイデガー

のように、超越論的主観性や絶対的エゴを認めず、事実的な自己の実存としての現存在に超越論的構成の根拠を求めることも考えていなかった。あらためてハイデガーの問いに対して、フッサール超越論的現象学の次元で解答するならば、ヴァルター・ビームルもいうように、フッサールにとって「自我はいつも事実的（心理学的）であると同時に超越論的なのである」²⁴。そして両者は現象学的還元に基づく「態度変更」によって相互変換可能な関係にある。しかも、超越論的自我は「現象学を営む自我」であり、常に人間的自我が自然的態度をとり続ける限り、それを成り立たしめ、「統覚作用」を司る隠れた主体であるということだ。

しかし、フッサールのいうように、超越論的自我と人間的（事実的・心理学的）自我とを「単なる態度変更によって」結びつけ、現象学的還元を理解していないとして、一方的にハイデガーの錯誤と不条理を指摘することで、超越論的自我の存在についての問いに對する十分な解決がなされたとはとうてい思われない。しかもフッサール自身もまた、「ブリタニカ」論文以後、ハイデガーの問いから帰結してしまった新しい問題——「逆説的な二義性」としての「超越論的自我と人間的自我との同一性の問題」——を検討せざるをえなくなってしまった。さらに、付け加えて指摘しておかねばならないのは、「現象学を営む」隠れた主体としての自我という超越論的自我の役割がフッサールによって自覚されたとき、「現象学を営む観視者」という「超越論的方法論」の主要テーマが顕在化してくるということだ。そして、それは、フィンクとの共同作業としての「第六省察」の中心問題に他ならない。それでは、フッサールは、「現象学を営む観視者」としての自我についてどのように考えていたのだろうか。それは、超越論的自我や人間的自我とどのように異なるのだろうか。しかし、これらの問いについての検討は、紙幅の都合上、別の機会に譲らなければならない。

（未完）

* 「フッサール著作集〔Husserliana〕」からの引用箇所は、文中括弧内に巻数をローマ数字で表記し、斜線の後に、頁数をアラビア数字で表記した。

〔注〕

- (1) K. Schumann, *Husserl-Chronik: Denk- und Lebensweg Edmund Husserls*, Den Haag, 1977, S. 488.
- (2) *Ibid.*
- (3) フィンクの「第六省察」の成立事情については、その邦訳者の一人である千田義光が「訳者あとがき」で適切に述べられている。新田義弘・千田義光訳「超越論的方法論の理念——第六デカルト的省察」岩波書店 一九九五年、二三五—二四六頁参照。
- (4) E. Husserl, *Brief an Roman Ingarden*, Hrsg. von R. Ingarden (PHÄNOMENOLOGICA 25), Den Haag, 1969, S. 161. (強調フツサル)
- (5) 引用は、「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学」第七三節「〔結論〕人類の自己省察としての、理性の自己表現としての哲学」からのものであるが、この節そのものは「危機」書が収録されている「フツサル著作集」第六巻の編者ヴァルター・ビームルによって、フツサールの遺稿の中から彼の選択によって末尾に付されたものである。したがって、フツサルが「危機」書の結語として準備していたかどうかについては問題が残されている。ちなみに、英語版「危機」書の編集・翻訳者であるデビット・カーはビームルの編集を恣意的なものとして理解しており、英語版「危機」書においては第七三節を「研究ノート」として扱い、補論として巻末に付している。ここでは「危機」書の成立を検討するものが本意ではないので、あえてこの問題に拘泥しないことにする。vgl. D. Carr, *Translator's Introduction*, p. xx, in: Edmund Husserl, *The Crisis of European Sciences and Transcendental Phenomenologie, An Introduction to Phenomenological Philosophy*, Translated, with an Introduction, by D. Carr, Northwestern University Press, Evanston, 1970.
- (6) 「現象学する (Phänomenologisieren || 現象学を営む) こと」という問題が、フィンクとの共同作業である「第六デカルト的省察」の主要なテーマのひとつであることはあらかじめ指摘しておくべきだろう。
- (7) ここで、行論上、〈哲学する態度〉と〈理論としての超越論的現象学〉とにフツサールの哲学活動を分類したが、両者が彼の「(人)生」と「著作」とに明確に分けられうるものではないことはいうまでもない。少なくとも、フツサルはフィンクの「第六省察」においては、現象学の自己関係性が言われていることから、このことは確認されよう。vgl. E. Fink, *VI Cartesianische Meditation, Teil I, Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre*, hrsg. H. Ebeling, J. Holl, G. van Kerckhoven, Kluwer Academic Publisher, 1988, §3. (エントメント・フツサル オイゲン・フィンク「超越論的方法論の理念——第六デカルト的省察」」新田義弘・千田義光訳、岩波書店、一九九五年、第三節「現象学の自己関係性」)

- (8) E. Husserl, Brief an Roman Ingarden, *op. cit.* S.54.
 (9) Ibid.
 (10) Ibid., SS.162-163.
 (11) Ibid., S.163-164.
 (12) Ibid., S.56
 (13) Vgl. E. Husserl, Briefwechsel, Bd. VII, Husserliana Dokumente III/7 (Dordrecht, Kluwer, 1994), SS.274-276.
 (14) R. Bruzina, Translator's Introduction, pp.x-xi, in: Eugen Fink, Sixth Cartesian Meditation, the idea of a transcendental theory of method, translated with an introduction by Ronald Bruzina, Indiana University Press, 1995.
 (15) E. Husserl, Brief an Roman Ingarden, S.60.
 (16) E. Fink, Studien zur Phänomenologie 1930-1939 (PHAENOMENOLOGICA 21), Den Haag, 1966, S.VIII.フーメンタの論文は、最初一九三三年の「カント研究」第三八巻に於いて「カント主義者に対する批判」を以て「フッサールの序言をこけて掲載されたもの」である。
 (17) E. Fink, *ibid.*, S.155.
 (18) E. Fink, VI. Cartesianische Meditation Teil I, Die Idee einer transzendentalen Methodlehre, S. IX. (福澤社) vii 頁)
 (19) E. Husserl, Briefe an Roman Ingarden, S.64.
 (20) Ibid., S.59.
 (21) 「世界化」の問題は自我の二重性（超越論的自我と心理学的・人間的自我）を考える上で、不可避の問題である。
 (22) E. Husserl, Brief an Roman Ingarden., S.43.
 (23) J. Derrida, La voix et le phénomène, Presses Universitaires de France, Paris, 1967, p.11.
 (24) W. Biemel, Husserl's Encyclopaedia-Briannica-Artikel und Heideggers Anmerkungen dazu, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1973 (宮武昭昭「フーメンタ」論文をめぐって「フッサールとフーメンタ」』、『現代思想・臨時増刊——特集「フーメンタ」』vol.7.12所収「青土社」一九七九年「二一七頁」)。強調引用者。
 想・臨時増刊——特集「フーメンタ」』vol.7.12所収「青土社」一九七九年「二一七頁」)。強調引用者。